The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

『略論安楽浄土義』についての一考察

溪　英　俊

研究の目的

『略論安楽浄土義』（以下『略論』）は、古くは『無量寿経優婆提舎願生偈註』（以下『論註』）、『讃阿弥陀仏偈』（以下『讃偈』）とともに曇鸞の作であると伝えられてきた。しかしその流伝上、曇鸞の作ではないと主張されることがあり、また浄土真宗においては親鸞の著述に引用が無く、『讃偈』のように勤行に用いられることもなかった。そのため、あまり重要視されてこなかったようである。

しかし大英図書館所蔵本（以下「スタイン本」）などの『讃偈』と一連の敦煌出土の写本が発見され、『略論』は書誌学的にも曇鸞の作であるとする意見が多数を占めるようになる。発見後、真宗学の立場からもいくつか論文が発表されている。その多くは敦煌出土の写本を根拠に曇鸞の作であることを前提に研究されているが、何人かの研究者はそれに疑問をいだいている。

小論は『略論』と『論註』との比較を行い、『略論』の位置づけをどのようにすべきか検討することを目的とする。

なお『略論』のテキストは『真宗聖教全書』（以下『真聖全』）一巻所収のものを用いる。これはスタイン本と同系統と考えられる敦煌出土の龍谷大学図書館所蔵本（以下「龍大本」）を底本にしているからである。

一　書誌学的評価と問題点

『略論』を曇鸞撰としない場合は、日本偽撰説（霊空）、道綽門下撰述説（僧樸）、羅什説があるが、道綽の『安楽集』に『略論』の引用があり、『略論』に羅什より前の訳出経論の引用があることから、これらの説は否定される。

さて書誌学的に『略論』を曇鸞撰述とする根拠は、敦煌出土本（スタイン本、龍大本）において、『讃偈』と『略論』が二種一具になっており、迦才の『浄土論』に見られる曇鸞伝の

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

法師撰集無量寿経。奉讃七言偈百九十五行。并問答一巻。流行於世。勧道俗等。決定往生。（『大正蔵』四七・九七下）

の記述と、スタイン本・龍大本の『讃偈』の尾題にある

讃有一百九十五行

の記述と句数が一致しており、『讃偈』に付して『略論』があったと伝わることである。

しかしスタイン本の尾題には「景雲二年三月十九日弟子張万及写」とある。景雲二年（七一一）は曇鸞没後約一七〇年である。これだけの時間が経過した書写本を曇鸞撰述の確定的根拠とするのは、いささか疑問が残る。

二　『略論』と『論註』の比較

それでは、『略論』と曇鸞撰が確定している『論註』の内容から考察してみたい。『略論』は九つの問答から成る。大別すれば第一問答、第二問答は「浄土について」の問答であり、以下は「衆生について」の問答であるとも考えられる。また第五問答から第八問答においては不思議智・不可称智・大乗広智・無等無倫最上勝智について解釈されるから、全体としては六つの問答から成るとする見方もある。

『略論』の内容を踏まえながら、『論註』との共通点・相違点を指摘する。第一問答では三界摂不について論じる。『大智度論』からの引文があり、これは『論註』と一致する。『大智度論』に「如是世界」とあるのが「如斯浄土」となっており、『略論』、『論註』では仏国が浄土に限定されている。「非三界所摂何以言之」は『大智度論』にはなく、筆者のことばで浄土が三界に超え優れていることを示されている。また『大智度論』では色界、欲界、無色界の順で述べるが、『略論』、『論註』では欲界、色界、無色界の順に変更されている。そして『論註』の引文では諸菩薩に通じる業因を、菩薩の別業として法蔵菩薩に限定している。『略論』ではこれに相当する内容が、続く『大経』取意の文の後に付される。

続く第二問答は荘厳の数量についての問答である。「尋讃可知」の『讃』とは、『讃偈』のことである。これはスタイン本、龍大本の発見と、迦才の『浄土論』の記述で確定できる。そして『無量寿経優婆提舎願生偈』（『浄土論』と略称）にもとづいて二十九種荘厳を列挙する。ただし『浄土論』、『論註』では国土・仏・菩薩の三種荘厳とされたが、略論では器世間荘厳と衆生世間荘厳の二種類で理解されている。しかし『浄土論』『論註』も器世間荘厳は国土荘厳、衆生世間荘厳を仏荘厳、菩薩荘厳に分解している。『略論』ではそれぞれの解説を目的としていないため、一応器世間荘厳と衆生世間荘厳の二種類をあげるにとどまり、細分化して解説しなかったと考えることができる。第一問答において『大智度論』、第二問答で『浄土論』を引き、浄土について述べることは、『略

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

論』と『論註』が同一の人物によるものであると考える根拠とする学者もいる。(1)

第三問答では『大経』『観経』に依り浄土に生ずる者の種類を述べる。『大経』によれば三輩、『観経』によれば九品があるとする。ただし『讃』は『大経』によっているから三輩とすると述べる。また中輩・下輩の解説に続いて、それぞれ胎生の往生が語られる。これは『大経』より先に漢訳された『平等覚経』と『大阿弥陀経』の中輩・下輩に、同様の説示があり、それは『大経』の胎化段に通じているとする指摘がある。(2) また『論註』には疑惑往生についての説示は見られない。

第四問答では、第三問答で示された疑惑往生による胎生者の果報を述べる。当然これも『論註』には見られない説示である。

第五問答は前の問答をうけて胎生の原因となる「疑」についての問答である。『大経』には「不了仏智」と出ているのみであるため、『大智度論』などによって解釈している。

経言業道如秤重者先牽（『真聖全』一・三七〇）

の『経』は『業道経』と考えられる。『論註』には

業道経言業道如称重者先牽（『真聖全』一・三〇九）

と、経典名を出し、同一の文を引用している。

第六問答から第八問答の前半は第五問答で示される「大乗広智」に関しての疑である。ここで「釈論言」として引用される『大智度論』の引文と『諸法無行経』の引文は、『論註』には見られない。

第八問答の中で、八地已上の菩薩が報生三昧を得ることが示される。この内容は『論註』にも見られる。もともと報生三昧に関しては『大智度論』からの引用である。石川琢道氏が指摘しているが、「報生三昧」という語は『大品般若経』と『大智度論』にしか見られない。『論註』と『略論』にその引用があり、ともにその三昧を得る地を八地已上と理解するのは、両書の大きな共通点である。しかし高田文英氏は

『論註』における報生三昧は、菩薩の往生後の得益として、その利他力の自在性が強調される文脈で用いられるのに対し、『略論』においては、仏智の絶対性の比較対象として、むしろその三昧力の有限性の側が説かれている点に相違が見られる。(3)

と述べ、両者の引用意図には差があるとする。

第九問答は下輩生の十念相続についての問答である。『略論』には如仏告頻婆娑羅王人積善行死無悪念如樹西傾倒必随曲也（『真聖全』一・三七五）

と示される。この記述について大田利生氏は

善行を積むことがすすめられているという点に『略論』の『論註』に見られない思想がうかがえるように思うのである。(4)

と述べている。しかし曇鸞は当時の習俗的・慣習的なものも『論註』の説示に用いている。ここでも、十念相続を世俗的な

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

価値観をもって勧めているとはみることができないだろうか。

『論註』は発菩提心を重視し、大乗菩薩道として自利利他の完成を三輩すべてに求める。そしてその完成を彼土に約する。[5] しかし『略論』では

一入正定聚更何所憂（『真聖全』一・三七五）

とのみ述べ、全体を通して行者の自利利他の完成について述べることが無い。

小結

以上検討したように、第一問答、第二問答の浄土についての問答に関してはほとんど相違点が見られない。しかし衆生についての問答は相違が見られる。特に『大経』以外で『大智度論』を主に用いて解釈することは『論註』と共通するが、同一の引文でも引意が異なる場合もある。また『論註』には見られない『大智度論』からの引文もある。これは『略論』の著者が『大智度論』に精通していることをうかがわせるのであり、『論註』の作者にも共通する。

また『讃偈』は勤行などの礼拝に用いられるようなものであり、『略論』はそれと一連のものであることがわかっている。そうであれば『論註』のように教義体系を述べることを目的としているのではなく、より一般的な疑問に答えることを目的としていると考えることはできないだろうか。仏智の絶対性を強調したり、一般的な善行を勧めるということも、そのような立場からすれば一応納得がいく。

曇鸞没後約一七〇年の写本をもとに、曇鸞の撰と確定することには疑問が残り、また『略論』に説かれている内容を『論註』と比較してみても、両者には共通点も相違点が見られる。しかし相違点についても見方を変えれば共通点となるような曖昧な部分が残ってしまう。いずれにせよ曇鸞撰述であると確定することには疑問が残る。

今後は『略論』に引用されるその他の経論との比較などから思想内容の検討を深めていくとともに、曇鸞在世当時の社会背景も視野に入れて研究を続けていきたい。

1　浅野教信「略論安楽浄土義における教義の一考察」（『曇鸞教学の研究（真宗学論叢一）』永田文昌堂、一九六二）。

2　浅野前掲論文や大田利生「略論安楽浄土義の一考察」（『真宗学』一〇九／一一〇、二〇〇四）などに指摘されている。

3　高田文英「『略論安楽浄土義』の思想背景—仏智疑惑論について—」（『真宗学』一二二、二〇一〇）。

4　大田前掲論文。

5　「『往生論註』における願生者の一考察」というタイトルで二〇一〇年に発表した。（『龍谷教学』三五）。

〈キーワード〉　曇鸞、『略論』、『論註』、著者

（龍谷大学大学院研究生）

NII-Electronic Library Service